

金持ちの話

著者	江口 一久
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	45
ページ	524-541
発行年	2003-12-26
URL	http://doi.org/10.15021/00001819



金
持
ち
の
話

241 たくさんの頭をもつ怪物とただの子ども

お話、お話。ジャッラ・タポイーエル。

さて、子どもがいた。子どもには家族がいた。子どもは野原に母親とすんでいる。母親は子どもを十人うんだ。この十人の子どものうち一人には、頭が二つあった。一人には、頭が三つあった。一人には、頭が四つあった。一人には、頭が五つあった。一人には、頭が六つあった。一人には、頭が七つあった。一人には、頭が八つあった。一人には、頭が九つあった。一人には、頭が十あった。十番目の子どもには、頭が一つあるだけだった。母親と子どもたちは、みんなそこにやってきて、野原にはいると、野原の動物をたべる。一人は人間だった。

さて、母親と父親は、人間の子どもに一本の杖をやった。頭をたくさんもっている子どもたちは、でかけていくと、つきからつきへと野原の動物をつかまえて、たべる。人間の子どもはじつとしていゑる。食べ物になかった。

さて、母親は人間の子どもに、「ここに杖がある。おまえもいきなさい。おまえはおまえとおなじような人のところにいきなさい。杖さえあれば、十分だ」といった。子どもは自分の杖をもった。子どもはあつちこつちをあるき、やってきた。

さて、子どもは人のすむ村にやってきた。子どもの杖は、鳥をたきおとせる。

さて、人が子どもをみて、子どもに、「だれそれよ、おまえさんの杖をおくれ。それで、鳥をうちおとす」といった。その人が鳥をうちおとしにいくと、杖がおれてしまった。

さて、子どもはたちあがり、大声をあげた。

さて、その人は、「どうしよう」といった。子どもは、杖を父親と母親にもらった、その杖で、食べ物や飲み物を手にいれるといった。子どもは、「どうしてくれる」という。

さて、その人は、「それでは、わたしはこの鳥をおまえにやる」といった。

さて、その人は鳥を子どもにやった。子どもはほとんどあるいていった。

さて、子どもがいくと、人びとは草をもやしていた。草をもやしている人は子どもに、「おまえさんの鳥をこちらによこしなさい。やいてあげよう」といった。その人は鳥をとり、やいていゑるうちに、鳥はもえてしまい、灰になってしまった。その人は灰をかきまわしたけれども、鳥はなかった。

さて、子どもはその人に、「わたしの鳥をかえしておくれ。やいていないのか」といった。

さて、その人がみてもみると、「やけすぎて、灰になってしまった」

といった。

さて、子どもはたちあがり、ないている。

さて、その人は、「どうしよう」といった。

さて、子どもは、「鳥で、食べ物や飲み物を手にいれる」といった。
た。

さて、その人は、「それでは、わたしはこの灰をおまえにやる」といった。

さて、その人はたちあがり、灰をとり、子どもにやった。子どもはほとんどあるいていく。

さて、子どもがやってくる、非フルベ族の人たちが藍染めをしていた。藍染めをしていたけれども、灰がたらなかった。子どもは、「そこだなにをしているのか」といった。藍染めをしている人は、「わたしの服をそめている。でも、灰がたらない」といった。さて、子どもは、「わたしの灰をおまえさんにあげる」といった。藍染めをする人は、「わたしにその灰をおくれ。藍染めにつかう」という。

さて、藍染めをする人は子どもの灰をうけとり、それをつかって藍染めをしにいった。藍染めをする人が子どもの灰をうけとり、それをつかって藍染めをしにいくと、子どもはやってきて、いくとい

つた。
さて、子どもは、「わたしの灰をかえしておくれ」といった。

さて、藍染めをする人は、「灰だつて。わたしはほかの灰を手に入れていない。なにができるか」といった。

さて、子どもはたちあがり、ないている。

さて、藍染めをする人は、「なにができるか。それでは、わたしはこの服をおまえにやる」といった。

さて、藍染めをする人はしろい服をとると、子どもにやった。さて、藍染めをする人は子どもに服をやった。子どもはほとんどあるいていく。

さて、子どもがやってくる、人が死んでいた。そこにいる人たちは埋葬するためのしろい服を手に入れることができなかった。人びとはないている。

さて、人びとは、「ほら、よそものがやってきた」といった。人びとは子どもにしろい服があるかどうかたずねた。子どもは服があると

いった。
さて、子どもはその人たちに服をやった。人びとはその服を死んだ人のところにもっていき、その人を埋葬した。

さて、その人を埋葬すると、子どもはなきだした。人びとは、「どうしたのか」といった。子どもは自分の服のためにないていると

いった。そこにいた人は、「おまえさんの服とはどういうことか。死体にきせて、埋葬したではないか」といった。子どもは、服と交換して、食べ物や飲み物を手にいれるつもりだったと

さて、人びとは、「どうしようもない。あの死体をほりだし、おまえさんにやろう」といった。子どもは、「うん」といった。人びとは死体をほりだしにいき、かえってきて、子どもに死体をやった。

さて、子どもはその死体をもった。

さて、子どもはいくと、その死体を木にもたれさせた。

さて、子どもはその自分のしろい服を死体にきせておいた。子どもはずっとそこにすわっている。

さて、人がやってきて、そこをとおりかかり、子どもに、「どうも」という。人がやってきて、そこをとおりかかり、子どもに、「どうも」という。人がそこにやってきて、女の死体をみて、「それはだれだ」といった。

さて、子どもは、「女だ」といった。

さて、その人はやってきて、死体のまわりをあるき、死体に手でふれ、うごかした。その人は死体にあれている。

さて、子どもは、「それは母さんだよ」といった。その人が死体をおすと、たおれた。死体がたおれた。人びとがみてみると、死んでいた。

さて、子どもは、「どうするのか」といった。

さて、子どもはたちあがり、ないている。死体をたおした人が、

「どうしたのか」といった。子どもは、「おまえさんは母さんをころしてくれた。母さんをころしてくれた。母さんをころしてくれた」といった。死体をたおした人が、「どうしたらよいだろう」といった。子どもはないまままだ。

さて、人びとは、「どうしようもない」といった。

さて、死体をたおした人は王さまの娘をつかまえた。

さて、死体をたおした人はその娘を子どものところにつれていった。人びとはその娘を子どもにやるべきだといった。子どもにその娘をやらなければといった。子どもが母親だといっているものかわりに、子どもによめさんをやろうというわけだ。

さて、人びとは子どもが母親だといっているものを埋葬した。王さまは子どもをよび、子どもによめさんをやるといった。人びとは娘たちをつれてきた。子どもは娘たちをみて、そのなかから一人をえらんだ。子どもはその娘をよめさんにする、母親はとりもどせないの、それでじゅうぶんだといった。ある日、子どもはでかけていく。

さて、子どもは自分のところにかえるといった。子どもは母親をみにいく。母親は野原の怪物だった。子どもはあるいていく。どんどんどんどんあるいていく。子どもと娘があるいていくと、頭が二つの怪物がいた。頭が二つの怪物が、「ようこそ、友よ。ようこそ、友よ。ようこそ、兄弟よ。ようこそ、兄弟よ」といった。

さて、子どもはそれにこたえた。頭が二つの怪物が、「おまえの杖はどこにある」といった。子どもは、自分の杖はなくなったといつた。頭が二つの怪物が、「その杖でなにをしたのか」という。子どもは、「ほら、ぼくはよめさんを手にいれた」といった。頭が二つの怪物が、「よめさんはどこにいる」という。子どもは、「ほら、ぼくのうしろにいる」という。

さて、娘はなきはじめた。子どもと娘はすすんでいった。二人がいくと、頭が三つの怪物が子どもをみて、「ようこそ、兄弟よ。ようこそ、兄弟よ。ようこそ、兄弟よ」といった。二人がつくと、頭が三つの怪物は子どもに、「おまえの杖はどこにある」といった。子どもは、「杖はなくなった」といった。頭が三つの怪物が、「その杖でなにをしたのか」という。子どもは、「杖のおかげで、ぼくはよめさんを手にいれた」といった。頭が三つの怪物が、「よめさんはどこにいる」という。子どもは、「ほら、そこにいる。頭よ」という。

さて、頭が三つの怪物はたちあがり、おどった。

さて、子どもはまえにすすんでいった。子どもと娘がまえにすすんでいくと、頭が四つの怪物がいた。頭が四つの怪物が、「ようこそ、兄弟よ。ようこそ、兄弟よ。かえってきたのか」という。子どもは、「うん」といった。頭が四つの怪物が、「おまえの杖はどこにある」といった。子どもは、「ごらんとおり、杖はなくなった」と

といった。頭が四つの怪物が、「その杖でなにをしたのか」という。子どもは、「ぼくはよめさんを手にいれた」といった。頭が四つの怪物が、「よめさんはどこにいる」という。子どもは、「ほら、そこにいる」という。娘は頭が四つあるのを見ると、大声をあげる。二人はさきにすすんでいった。二人はいつてしまった。

さて、頭が六つある怪物が子どもに、「ようこそ、兄弟よ」といった。子どもは頭が六つある怪物にであった。頭が六つある怪物が、「おまえの杖はどこにある」といった。子どもは、「ごらんとおり、杖はなくなった」といった。頭が六つの怪物が、「その杖でなにをしたのか」という。子どもは、「ぼくはよめさんをもらった」といった。頭が六つの怪物が、「よめさんはどこにいる」という。子どもは、「ほら、そこにいる」という。

さて、怪物はおどりながら、野原にいった。娘はずつとよこになって、ないている。子どもは自分たちのところにかえるといつた。二人がまえにすすんでいくと、頭が七つある怪物がいた。頭が七つある怪物は子どもに、「ようこそ、兄弟よ。ようこそ、兄弟よ」といつて、むかえた。頭が七つある怪物は、「おまえの杖はどこにある」といった。子どもは、「杖はなくなった。杖はなくなった」といった。頭が七つの怪物が、「その杖でなにをしたのか」という。子どもは、「ぼくはよめさんを手にいれた」といった。頭が七つの怪物が、「よめさんはどこにいる」という。子どもは、「ほ

ら、そこにいる、頭よ。よめさんがいる」という。頭が七つある怪物が、「よめさんはどうしてないているのか」という。子どもは、「頭をみたからだ」といった。頭が七つある怪物は、「頭をみて、なくのをよしなさい。頭はさきにいる」といった。二人がまえにすすんでいくと、頭が八つある怪物がいた。頭が八つある怪物は子どもに、「ようこそ、兄弟よ。ようこそ、兄弟よ。おまえの杖はどこにある」という。子どもは、「杖はなくなった」といった。頭が八つの怪物が、「その杖でなにをしたのか」という。子どもは、「ぼくはよめさんを手にいれた」という。頭が八つの怪物が、「よめさんはどこにいる」という。子どもは、「ほら、そこにいる」という。頭が八つある怪物が、「よめさんはどうしてないているのか」という。子どもは、「頭をみたからだ」といった。頭が八つある怪物は子どもに、「頭をみて、なくのをよしなさい。頭はさきにいる」といった。二人がまえにすすんでいくと頭が九つある怪物がいた。頭が九つある怪物は子どもに、「ようこそ、兄弟よ。おまえの杖はどこにある」といった。子どもは、「杖はなくなった」といった。子どもは、「ぼくはよめさんを手にいれた」という。頭が九つある怪物が、「よめさんはどこにいる」という。子どもは、「ほら、そこにいる」という。頭が九つある怪物が、「よめさんはどうしてないているのか」という。子どもは、「頭をみたからだ。まちがひなく頭をみたからだ」といった。頭が九つある怪物は、「なくのをよしなさい。

頭はさきにいる」といった。

さて、二人は人の体のうえに頭が十ある怪物をみつけた。

さて、頭が十ある怪物がやってきて、子どもに、「ようこそ、兄弟よ。ようこそ、兄弟よ」といった。子どもはそれにこたえた。頭が十ある怪物は、「おまえの杖はどこにある」といった。子どもは、「杖はなくなった」といった。頭が十ある怪物が、「その杖でなにをしたのか」という。子どもは、「ぼくはよめさんを手にいれた」といった。頭が十ある怪物が、「よめさんはどこにいる」という。子どもは、「ほら、そこにいる」という。頭が十ある怪物が、「よめさんはどうしてないているのか」という。子どもは、「頭をみたからだ」といった。

さて、娘はしずかになり、なくのをやめる。娘は頭をみる。頭が十ある怪物がいう。

「ようこそ、友よ。

おまえの杖はどこにある」

子どもはいう。

「友よ、ぼくはよめさんを手にいれた」

頭が十ある怪物がいう。

「よめさんはどうしてないているのか」

子どもはいう。

「友よ、ぼくは頭をみた。

まぢがいなく、よめさんが頭をみたからだ。

天の主よ、よめさんが頭をみたからだ」

頭が十ある怪物はおどつている。頭が十ある怪物はあっちこっちをあるいている。頭が十ある怪物はよろこびの声をあげる。娘は頭がたくさんある怪物をみた。頭が十ある怪物はよろこびの声をあげる。よろこびの声をあげる。頭が十もある怪物がよろこびの声をあげる。子どもはいう。

「よめさんは頭をみた。

よめさんは頭をみた。

よめさんは頭をみた」

頭が十ある怪物はおどつている。娘は大声をあげている。とうとう、二人は母親のところについた。娘は頭を十もつ怪物をこわがった。一人なのに、十も頭をもつとはどういうことか。

さて、子どもは母親のところについた。娘はないままで、食べ物もたべようとしないうし、飲み物ものもうとしなかつた。二人がいくと、子どもの母親がすわっていた。母親は野原の怪物だった。子どもの父親がすわっていた。父親は野原の怪物だった。子どもはすわった。母親は子どもをむかえた。母親と父親は子どもをむかえた。娘は食べ物をつたべようとしなかつた。子どもは、「よめさんは母さんたちの食べ物をつたべない」といった。父親は娘のたべるものをさがしてきた。娘はたべられなかつたので、ないている。

さて、子どもはここにすまないといった。

さて、母親は、「どうするつもりかい」といった。

さて、子どもは、「どうしようもない。よめさんをつれていくしかない」といった。

さて、母親と父親は子どもに、「よろしい、そうしてよい。アッラーがさだめられて、おまえはわたしたちとはちがう人種になった。もどつていきなさい」といった。母親と父親は娘に、「いって、おまえさんはおまえさんの母親とすみなさい」といった。

さて、子どもはよめさんをつれて、よめさんの父親の町にかえってきた。二人はかえつてきて、おちついた。こうして、子どもはよめさんとすんだ。子どもはそこにずっとすんでいた。そのうちに、人びとは子どもが王さまになればよいといった。こうして、人びとはこの子どもをよめさんの町の王さまにした。子どもはおちついた。子どもはよめさんの町にやってきました。よめさんの父親が死んでしまった。よめさんの母親が死んでしまった。こうして、子どもは王さまになった。二人はそこにすんだ。二人は子どもをうむ。二人は二度と野原にいかなかつたとき。

(一九八三年一月二一日、語り手 ハッジャ・ラブラトゥ・イスフ、ガウンデレにて)

242 どうして男の子が金持ちになったか

この話は、ある女とある男の話だ。

さて、この男には、ながいあいだ子どもができなかった。男はきょう結婚する。男はつぎの日に結婚する。男は女を離縁しては、べつの子と結婚する。またしても、離縁する。男は子どもがほしかつた。

さて、男はべつの子と結婚した。そのよめさんがやってきた。男とよめさんは、ずっとそこにすんでいる。

さて、よめさんのお腹がおおきくなった。

さて、わかるな。女のライバルたちは、女のことばかりいだつた。

さて、ライバルたちはこの女を嫉妬しはじめた。

さて、女のライバルたちが嫉妬しはじめ、男はうまくいかないということをさとり、女のライバルたちを離縁してしまった。

さて、男は女のライバルたちを離縁した。男はお腹のおおきくなった女だけをおいておいた。女と男はそこにすんでいる。女は男に男の子をうんでやった。そうすると、わかるな。女の子を手にいれるだけでも、うれしい。男の子を手にいれたのだから、なおさらだった。その喜びには限りがなかった。二人にとっては、たいへんうれしいことだった。男の子に名前をつけた。名前をつけたあと、男

と女と子どもはすんでいる。ある日、みしらぬ人がやってきた。みしらぬ人がやってくると、男と女と子どもがいた。

さて、みしらぬ人は、「平安、なんじらにあれ」と挨拶をした。みしらぬ人は、自分はよそのものであるが、おねがいだから、自分をつすけてくれ、一晩をすごさせてくれとたのんだ。そのつぎの朝、自分はいこうとしているところにつくとといった。男と女は、「わかつた。問題はない。おまえさんは、客ではないか」といった。二人は客に、場所をつくつてやった。客はそこでねた。二人はこの客に食べ物をやった。客はそれをたべた。夜があけて朝になり、客は起きた。ほんとうのこと、この客はイスラム教の先生だった。朝になり、でかけていくとき、客は屋敷の主人に、「おまえさんは、わたしをたすけてくれた。おまえさんは、わたしにいいことをしてくれた。では、わたしも、おまえさんにお礼をしよう。はい。これをおまえさんの子どもにつけてやりなさい。アッラーがうけいられるなら、おまえさんの子どもは王さまになるかもしれないし、お金持ちになるかもしれない。だから、これをもつていなさい。おまえさんの子どもがおおきくなれば、体につけてやりなさい」という。

さて、その人は別れをいって、感謝した。客はいつてしまった。さて、子どもがおおきくなったある日、男は子どもに先生にもらったお呪いを身につけてやった。男の子はそれを身につけている。

さて、男の子はそれを身につけている。とうとう、男の子はおおきくなり、若者になった。若者は、いくさきざきで、めだつた。若者はみんなにすかれた。いくさきざきで、若者はすかれた。ある日、ほんとうのこと、若者といっしょにいる友だちは、若者に嫉妬している。嫉妬するではないか。でも、若者はそのことをしらなかつた。ほんとうのこと、友だちはなんとかして、若者をころそうとしていた。

さて、若者はそれをしらなかつた。アツラーがそうなかつたのだけれども、この若者は自分の父親とおなじで、人がすきで、人をたすけ、人にいいことをする。若者も、父親のような性格をもつてうまれてきた。

さて、若者はいた。いつも、若者は市場にでかけていくとき、道すがらあるところによる。ある屋敷があつた。若者が田舎にいくとき、その屋敷は若者の家と田舎のちようどあいだにあつた。若者はその屋敷につくと、そこにたちより、そこで礼拝をしたり、やすんだりする。若者はそこにいくと、いつも、その屋敷にいる女たちにいいことをしてやつた。そこに老女がいたが、もうすつかりよわつていた。この老女もその屋敷にいた。

さて、ある日、若者の友だちはたくらみをし、若者をころそうとした。若者はそれをしらなかつた。友だちが屋敷にやつてくると、若者がいたではないか。若者はここにいる人たちのだれよりも、腕

につけたお呪いのおかげで、ひかりかやっていた。この田舎には、このような若者がいなかった。わかるな。それで、だれもが、若者のことをすいた。若者には、腕につけたお呪いがある。

さて、若者はやつてきた。若者は市場をたち、家にかえつていく。そうして、若者はいつもいく屋敷をおとすれて、そこにいる人たちに市場でかつたものをみんなやつた。若者はやつてくると、塩や粗塩などをすべて、この屋敷の人たちにやつた。

さて、若者がその屋敷からでていこうとする。

さて、老女は若者をよび、若者に、「おねがひがある。おまえさんがかえるとき、おまえさんがいつもとおりの道をとおらないように。べつの道があるきなさい。べつの道がないなら、野原をよこぎりなさい」という。

さて、若者は、「あなたは、どうして、そんなことをわたしにいうのですか」といった。

さて、老女は、「それでは、またあしたあいましょう。それでは、またあした、おまえさんがきたら、どうして、おまえさんにそういつたかおしえてあげよう」という。若者は老女に、「よろしい」という。若者はいつもとおる道があるかなかつた。若者は野原をよこぎつていった。若者はいつもかえるときにとおりなれた道をとおらなかつた。

さて、若者をころそうとしている人たちはその道にいた。この

人たちは木にのぼった。木にのぼって、若者をまっけている。若者がやってきたら、若者にむかって矢を射てやろうとしている。弓と矢で、若者をころしてしまおうというわけだ。

さて、若者は野原にある道があるいていった。若者はほとんど野原をあるいて、家にかえっていった。家にかると、若者はひとりでかんがえる。若者はそのことを父親にいわなかった。若者は母親にもいわなかった。若者はすわって、かんがえている。ほんとうのこと、そのことが気にかかる。若者は、「どうしたのだろう。あの老女があんなことをいうとは」という。

さて、母親が小屋にはいると、息子がいた。母親は息子に、「家にかえってきたのかい」という。若者は母親に、「うん。家にかえってきた」という。母親は、「それで、どうしたのか。おまえさんはずわって、うなだれている」という。

さて、若者は、「なんでもない」という。若者は母親にいおうとしなかった。母親は小屋からでていった。母親はいくと、息子の食べ物をとって、もってきてやった。若者はそれをすっかりたべてしまった。若者はそこをとりすぎると、よこになった。その日、若者は夜あそびにでかけていかなかった。若者はねている。

さて、夜があけて、朝になった。日がのぼってきた。若者はましても野原にある道があるいていった。若者は老女のところにいった。若者は老女に、「どうして、あなたはわたしに、わたしがか

えるときにとおりなれた道をとおるなといったのか。あなたは、わたしに、野原の道をとおれといった」という。老女は、「なるほど。いま、この服をきなさい。おまえさんのきている服をぬぎ、これをきなさい。かえるときにとおりなれた道があるきなさい。おまえさんがあるいていくと、だれかが死んでいるだろう。その人は死んで、よこたわっているだろう。おまえさんがうえをみると、残りの人たちが木のうえにいるだろう」といった。

さて、若者が、「残りの人たちだつて」という。老女は、「おまえさんのしっている人だよ」という。若者はそのことで、おどろき、たいへんびっくりした。若者は、「これは一体どうしたのだろう」といった。老女は、「ほら、この服をとり、きなさい。いって、かえってくるのだ。わたしはおまえさんに、だれがたくらんだのかおしえてあげよう」といった。

さて、若者は、「よろしい」といった。若者は自分の体につけていた服をぬいだ。若者は老女から服をうけとって、きた。若者はいつもの道があるいていった。若者がいくと、だれかがたおれて、死んでいた。若者の友だちが矢で射たのだった。若者はそこをとりすぎるふりをし、とおくまでいった。

さて、若者はもどってきた。若者はかえってきた。若者はかえってくる。

さて、若者はうえをみた。

さて、若者は何人かの人が木のうえにいるのをみつけた。

さて、若者はそこをとりすぎ、老女のもとにかえってきた。若者は老女に、「まちがいなく、あなたのいつていたとおりのもをみた。アッラーはその人たちをみせてくださった。よろしい。わたしに、だれが、どうして、こんなことをしたのかいつておくれ」という。老女は、「よろしい。どうしたかという、あの人たちはすわって、たくらみ、おまえさんがなにをしても、いつて、おまえさんをころすことにした。さて、その人たちはいくと、木にのほつた。おまえさんのみた、その人たちにころされた人は、『いや、ころす必要はない。あの人にはわしちに迷惑をかけたことがない。あの人にはわしらを馬鹿にしたことがない。あの方は、なにもしたことがない。どうして、あの人をころすのか』といった。それで、残りの人たちはその人を矢で射て、ころしたのだ。いま、その人は、そこによこになつてゐる。木のうえにいる人たちはおまえさんをまつてゐるのさ。おまえさんがそこにやってくると、ころしてしまつたらう」といった。

さて、老女は、「よろしい。でも、みたところ、わたしはあの人も、あの人もしつてゐる。あの人たちはみんな、おまえさんの友だちなのだ。相談なのだけれども、おまえさんはどこかにいつて、いまいる村をはなれるのだ。おまえさんは、べつの村にいくのだ。時間がつたつても、いつか、おまえさんはころされるだろう」という。

さて、若者は家にかえつてきた。若者は自分の母親と父親にそのことをはなした。父親は、「よろしい。問題はな。アッラーがおまえに幸せをあたえられますように。どこにでもいけ」といった。若者はいくと、荷物をまとめた。若者は自分の矢と弓と短刀をもつた。若者は道のあるいつていった。若者はある田舎にいき、そこにおちついた。若者がその村につくと、アッラーは、若者に幸せをおあたえになった。若者の手にいれた親方、つまり、若者の小屋の持ち主は、そのとき財産をもつていた。親方は商売をする。

さて、親方はかえつてくると、若者を自分の財産をつかわせて、商売をさせた。そうしてゐるうちに、数年たつと、若者はたくさんの財産をつくつた。財産はいっぱいになった。小屋の持ち主も、若者も財産ができた。若者はやつてくると、自分の父親と母親をそこにつれていつた。「あいつをころせ」といつていた若者の友だちは、みんなこの若者のものにもどつてきた。友だちはそこにいつた。そうして、友だちは、若者に、こうして、自分たちが若者をころそうとたくらんだのだと、ほんとうのことをのべた。

さて、友だちはあやまつた。そのあと、友だちは若者に自分たちの口で、「わかるな。こうして、おまえさんのことをわるくいつた。こうして、おまえさんのことをわるくいつた。こうして、おまえさんころそうとたくらんだ」といつた。

さて、これは、つくり話だ。この話には、すこし真実味がある。

すこし、つくったところもある。このなかには、すこしばかり、つくり話もまざっている。みんな、つくり話なのだよ。

(一九八九年二月二日、語り手 ナイジェリアのヨーラ出身のアーイサトウ・アーマドウ、マイドウグリにて)

243 どうしてある男が王さまの欲のおかげで、村長になれたか

わかるな。この世で、ある人たちはいろいろなことに心をまどわせている。教えとか、その喜びなどがわからない。

さて、あるところに、女がいた。いい格好をした若い女がいた。この女はモスクのちかくにすんでいた。

さて、夜明けどき、礼拝のときをつげる男が礼拝のときをつげにいった。男は、「あの女はとおくない。いかせてもらおう」といった。女と礼拝のときをつげる男は話がついていた。男は礼拝の導師がやってくるまで、自分もたのしませてもらおうと、女のところに行く。男はたちあがり、女のところに行った。女は男をむかえた。男は用をすませた。

さて、導師も、礼拝のときをつげる男が二回目の礼拝のときをつげるまでに、用をすませ、いって、水浴びをして、やってこようとした。

さて、導師がやってくると、わかるとおもうが、女は礼拝のときをつげる男に、「わたしの夫が家にかえってきた。さあ、ベッドのしたにはいりなさい」という。

さて、礼拝のときをつげる男はベッドのしたにはいった。

さて、導師がやってきて、用をすませると、王さまは、礼拝のときをつげる男が二回目の礼拝のときをつげるまでに、女のところいき、用をすませ、屋敷にもどり、水浴びをして、モスクにやってこようとしていた。

さて、王さまがいくと、(服をぬぐ。こうして) 礼拝のときをつげる男も、導師も、王さまもみんな服をぬいで、服をおいておいた。

さて、王さまがやってきて、用をすませた。

さて、女のほんとうのむこさんが家にかえってきた。むこさんが家にかえつてくると、女は王さまに、「ベッドのしたにいきなさい」といった。王さまがベッドのしたにいくと、礼拝のときをつげる男と導師がいた。

さて、むこさんは家にかえつてくると、よこになり、背伸びをした。つかれていたので。

さて、女が話をしようとして、「アッラーは王なり。気の毒に」といった。ベッドのしたにいる男はみんな女が自分にはなしかけているとおもっている。

さて、導師は、「なんだって。わたしにだけはなしかけるのか。わたしは導師だが、王さまもいる。どうして、わたしにだけはなしかけるのか。わたしが一人だけにいるとおもうのか。女はわるい。おまえは人殺しをするつもりか。そんなことにならないように。わたしが一人だけにいるのではない」といった。

さて、男たちはみんなベッドのしたからでてきた。どの男も戸口にむかって、さきをいそいだ。みんな裸だった。

さて、こうして、女のむこさんは服を手にいれた。それで、これはどういふことになるのか。

さて、みんなおちついていて。女のむこさんは寛衣をきて、でてきた。王さまはどういうつもりだろう。

さて、人びとはどうなっているかわかった。王さまは男に、「この話ははずかしい。この話がそとにでないようにするように」といった。

さて、王さまはそのへんをまわり、ある草も木もはえていない土地をとり、女のむこさんにそこをおさめさせた。王さまはその男をその村長にした。男は村長になった。こうして、男はよめさんのおかげで、村長になった。わかるな。女はだれかをすきになると、どうしたらよいかよくわかつている。女が、どうしてむこさんを村長にしたかわかったな。まるで、冗談のようだが、男はそのまえの日、王さまが着て、裁判をしていた寛衣をきた。男はその服をき

て、みんなのところにてきた。王さまは、それをみて、はずしくおもった。王さまは男になにもいわず、男に、「こい。わかるか。あの話はわしらのそとにてはならない。おまえさんは、わしに村長にしてもらったというのだ」といった。男が王さまの服をきているのは、王さまが男を村長にしたからだというわけだ。

さて、王さまは、「おまえさんは、北にある村の村長になるのだ」といったとさ。

さて、この話はこのようになった。
(一九八三年一月二日、語り手 サーリ・ジーカ、ガウンデレにて)

244 よめさんが遊び人であつたおかげで富をえた

男

ある男に、よめさんが四人あつた。

さて、男の財産がなくなつてしまった。

さて、男はでかけていこうとした。男がいくと、第一夫人がいた。男は、「こういうことで、わしはでかける。わしはやくかえつてこないということがわかつている。わしには財産がない。わしは財産をさがしにいく」といった。第一番目のよめさんは、「よろしい。一生懸命にやりましょう。わたしは、あなたがかえつてくる

まで、あなたの畑をはしから、はしまでたがやしましょう」といった。もう一人のよめさんは、「わたしはあなたがえってくるまで、あなたの屋敷の土塀をつくりましょう」といった。男は、「よろしい」という。もう一人のよめさんは、「わたしは、あなたがえってくる日まで、あなたの屋敷をあなたのために掃除してあげましょう」といった。四人目のよめさんはカヌリ族の女だった。女は、「わたしは、あなたがえってくるまで、夜遊びをし、あっちこっちにいき、すきなだけ酒をのみます」といった。男は、「よろしい」というと、どこかにいってしまった。一人の女は土塀をつくらう。もう一人はどこにもいかずに、屋敷を掃除し、きれいにする。

さて、男がかえってくる日になった。男はカヌリ族の女の小屋の戸をたたいた。カヌリ族の女は男に、「さきにあるべつ的小屋にいておくれ。わたしはいまそとにでません。戸をあけません」といった。この土地の王さまの息子がカヌリ族の女とねていた。男は二人目のよめさんの小屋の戸をたたいた。男はそこでねた。

さて、夜明けどきになった。

さて、王子がとびおきて、女に、「これから、わたしは家にかえる。父はわたしに、妹をつれてモスクにいき、施しものにするようにといった。わたしが最初にであった人に妹をやるのだ」といった。

さて、王子がでていった。カヌリ族の女ははしつていき、男のい

る小屋の戸をたたいた。女は男に、「どんだんはしつていきなさい。とまっではいけない。はやくはしりなさい。モスクにだれよりもさきにいきなさい。こういうことで、王さまは施しものをなさる」といった。男は草履を手にもって、どんだんはしつていき、とうとうモスクについた。

さて、モスクにつくと、男はモスクにはいった。そこに王子と娘がいた。王子は娘をさしだして、男に、「ほら、王さまがおまえさんに施しものをやるようにといわれた」といった。男は娘をうけとり、家にかえつてきた。男は家についた。

さて、男はいくと、娘をカヌリ族の女の小屋にいらしておいた。男は娘を手にいれると、つれてきて、カヌリ族の女の小屋にいらしていた。

さて、朝になり、あたりがあかるくなった。太陽があがつてきた。(王さまが施しものをしたので) この世にあるありとあらゆるものが、ながれるようにして、男の屋敷にはいつてきた。ないものがなかった。

さて、男はやつてきて、カヌリ族の女に、「これから、この王女をどこにおいておくべきか」とたずねた。カヌリ族の女は男に、「人びとが掃除をしたところにこそ王女がすむのにふさわしい」といった。

さて、男は自分の屋敷をこの地区のどの屋敷よりもきれいに掃除

をしていたよめさんをおいでした。(なぜこのよめさんをおいでしたかはわからない。)男はこのよめさんを離縁し、王女をつれてくると、そこにすませた。男は土塀をつくらせていたよめさんをおいでした。男は畑をたがやしていたよめさんをおいでした。男はカヌリ族のよめさんだけを屋敷にのこしたとき。

お話はみじかく、わたしの命はながい。

この屋敷の主人は富をえた。

(一九八三年一月二七日、語り手 ハディージャ・プーバ、ガウ
ンデレにて)

245 追い剥ぎたちとつよい若者

ある男によめさんがあった。よめさんの村はどうしようもないほど、とおかった。よめさんの村がおかったし、追い剥ぎたちがその村にいく道に小屋をつくったので、だれもそこにいくことができなかつた。だれも、そこにいく人がいなかったたので、女が村まで、旅にでるとき、男は、「アッラーよ、だれかわたしのよめさんをよめさんたちの村までつれていってくれる人はいないか」という。というのは、よめさんの母親がよめさんをよんでいたし、よめさんも子どもをうんだからだ。男は、「だれがよめさんをつれていってくれるだろう」という。

さて、男は、「おまえさんは、よめさんをつれていってくれるか」といった。男の幼友たちのうち一人が、「きみのよめさんをつれていってやる」といった。ほんとうのこと、この幼友たちは臆病者だった。男のよめさんは、パルタ菓子、たいたブグム(プレクトラントウスの一種、地下莖がたべられる。ジャガイモのような味がする)、いったヴォアンズー豆、油であげたニワトリ、コメ、バエーリとよばれるモロコシの粉、あかいモロコシの粉などを準備した。女と男の幼友たちは旅にでかけた。人びとはモロコシの玉と酸乳をまぜて、それを子供の男にわたした。男はそれを肩にかけた。二人は旅にでかけた。どんどんすすんでいき、やすんだ。そのうちに、二人は追い剥ぎのところにいった。二人はイチジクの木の下にいった。二人は子どもをおろして、飲み物をのもうとする。と、追い剥ぎたちのうち一人が木からおりて、「その女よ、それはおまえさんのむこさんか」という。女は、「これはわたしのむこさんではない」という。女はふるえはじめた。

さて、追い剥ぎが、「さつさと、モロコシの玉と酸乳をかきまぜて、わしらにくれ。わしらがのむ」という。

さて、男はモロコシの玉と酸乳をかきまぜて、追い剥ぎにわたした。追い剥ぎたちはそれをのんだ。追い剥ぎは、「おまえさんの名前はなんというのか」といった。女は、「わたしの名前はアイサトウ」という。

さて、追い剥ぎは、「おまえさんの名前がアイサトウなら、わたしはおまえさんをころさない。というの、わしの母親もアイサトウという名前だからだ。わたしはおまえさんをころさない」という。追い剥ぎたちは、男をとりかこみ、「おまえさんの名前はなんというのか」という。男は、「わたしの名前はアイサトウよりほかにあるというのか。わたしの名前はアイサトウ」といった。

さて、追い剥ぎたちは男に、「きて、ここにしゃがめ。ここでウソをしろ」という。男がやってきた。追い剥ぎが、「ここにウソをしろ」という。男はそこでウソをした。追い剥ぎが、「木の葉っぱをとって、きて、ハエをおえ」という。男は木の葉っぱをとりにいき、やってくると、女の顔につくハエをおっている。追い剥ぎたちは女とたのしんでいる。

さて、それからすこしすると、追い剥ぎたちは、「おまえさんの身につけている着物をぬげ」という。女は着物をぬいだ。追い剥ぎたちは、「おまえさんの身につけているものをとれ」という。女は身につけているものをとった。追い剥ぎたちは、「それをこの男にわたせ。この男がぎるのだ」という。男はその着物をきて、腰布をまいた。追い剥ぎが、「この子どもをうけて、背中にせおえ」という。男は子どもをうけとり、背中にせおった。追い剥ぎが、「女よ、この男の服をとれ」という。追い剥ぎは二人のさきがあるき、二人はそのあとをあるく。とうとう、追い剥ぎたちは、二人を村のちか

くまで、つれていった。男は大声をあげた。男が大声をあげると、そこにあつた屋敷の人たちがでてきた。追い剥ぎははしって、野原にもどつていった。人びとはわらつた。人びとは、「どうなっているのだ」という。女は、「アッラーよ、おゆるしください。追い剥ぎのおかげだ」という。女とお供の男はもどつていった。二人は、でてきた村にもどつていった。追い剥ぎが二人のいきたい方にいかせてくれなかつたので、二人はかえつていった。人びとは、「いったいどうなっているのか。いったいどうなっているのか」という。二人は、「追い剥ぎはわたしたちにこういうことをしてくれた。わたしたちがあるいていくと、追い剥ぎはわたしたちにこういうことをしてくれた」といった。女は、「わたしの名前はアイサトウといつた。追い剥ぎはすぐに、自分の母親とおなじ名前だ、アイサトウはころさない。追い剥ぎはこの人の名前もきいた。この人も、自分の名前はアイサトウよりほかにないといつた」という。

さて、この女のむこさんはそれをきいて、わらつている。ちいさな若者がわらつている。若者が、「女よ、おまえさんは、おまえさんの家族のところいきたいか」という。女は、「うん、うん」という。若者は、「まえとおなじように準備をなさい。わたしがつれていってあげる。もし、アッラーがそれをゆるされるなら」という。女は準備をした。若者はちいさな短刀をといだ。若者は、「むこさんよ、よかつたら、おまえさんのよめさんをよめさんの家族の

村まで、つれて行ってやる。わたしはつれて行ってやる」という。女のむこさんは、「つれて行ってやっておくれ」といった。

よろしい、さて、女はまたしても、旅にでかけた。追い剥ぎたちがいるところにつくと、そこにイチジクの木があった。若者は女に、「すわって、モロコシの玉と酸乳をかきませて、子どもにのませてやりなさい」といった。女は、「いやいや、ここに追い剥ぎたちがいる」という。若者は、「なんだって、おまえさんがのむなら、荷物をおろしなさい。わたしは、この子どもとのむ」という。

さて、女は荷物をおろし、モロコシの玉と酸乳をかきませた。かきませおえたとき、追い剥ぎたちが木からおりてきた。木からおりると、若者は、「おまえさんたちもこれを見たいのか」という。追い剥ぎは、「女よ、それをわしらにくれ。わしらがのむ」という。女は、「いや」といった。若者が、「どうして、この人がおまえさんにくれてやろうか。いや、やらない」という。

さて、一人の追い剥ぎが、ナマルドゥ型（どんな形か不詳）の鉄砲をもって、ちかづいてきた。追い剥ぎは若者にちかづいた。

さて、若者は追い剥ぎにこのようにすると、追い剥ぎを短刀でさした。追い剥ぎがたおれると、若者は鉄砲をとってしまった。若者は鉄砲で残りの追い剥ぎたちをたたいている。若者は二人の追い剥ぎをころしてしまった。

さて、残りのものたちはにげてしまった。若者はあとをおいか

けていき、追い剥ぎたちの仮小屋についた。つくと、小屋のなかには、いろいろなもの、布地などのはいた籠など、この世にないもの以外、ないものがなかった。なんと、若者は小屋につくと、自分に十分だけのものをいれた包みをつくった。残りは、とると、べつのところにかくしておいた。女も、とると、包みをつくった。二人はそれを頭にのせて、女の家族のいる村についた。なんと、女の家族は二人のために、家畜をころしてやり、いろいろなことをしてやった。若者は、「わたしたちは追い剥ぎにであい、このようなことをしました。でも、おねがいです。王さま、二人の人をください。その人たちについてきてもらい、追い剥ぎたちからうばったものをとります」といった。若者たちは荷物をとりにいった。王さまは、「兄弟よ、ご苦労さん。ようこそ。そこにいる追い剥ぎたちがいつも、わしらが水汲みにいく邪魔をする。でも、アツラーのおかげで、おまえさんは追い剥ぎをたいらげてくれた。わしは、おまえさんにわしの領地の半分とわしのウシの囲いのなかにいるウシを半分とわしの臣下の半分をやる。わしはおまえさんによめさんやる。おまえさんはここにすむのだ。でも、わしは女のむこさんのところに使いをだし、むこさんにきてもらい、女をつれてかえつてもらう」といった。

さて、女のむこさんがやってきて、自分のよめさんをつれていったとき。

おしまい。

(語り手 一九七二年一月二日、パーセーウオ村出身のアップ
ドゥッラーイ・オスマース、マルアにて)

246 女と子どもと泥棒

ある女は男と田舎で結婚した。いつも、男は女をたたく。ある日、女は、「なんだって、わたしはもういやになった。わたしは苦しみからにげる。この男はいつも、わたしをたたき、つらい目にあわせる」といった。女は昼にたちあがり、夕方、自分の子どもをせなかにせおい、自分の着物をもった。女はにげていく。女はおい野原のまんなかにいった。

さて、女はおおきなダウンデの木(クワ科のフィクス・プラティフィツラ。大木になる)をみつめて、その木にのぼって、木のうえにいる。

さて、夜になった。女はしらなかつたのだけれど、このダウンデの木の下に、旅人たちが荷物をもつて、やってきて、やすむのだった。真夜中、女は子どもと木のうえにいる。さむくなつてきた。市場にいくのだから、旅人たちがやってきて、ロバから自分たちの荷物をおろした。荷物をロバからおろすと、自分たちの荷物をそこにのこし、ピトワ(ガルのちかくにある)の市場にいこうす

る。真夜中、旅人たちは火をたいて、よこになつて、ねた。

さて、一人がのびをした。さむかつたので、目をさましたのだ。のびをし、さむかつたが、その人は子どもがすわっているのを見た。その人は、「子どもよ、アツラーにつかわされたのか」という。子どもは、「うん」という。その人は、「ちょっとウンコと小便をしてくる。くるから」という。その人は、たちあがるとにげていった。その人は、荷物をおいていった。もう一人もさむかつたので、のびをして、目をさますと、火のそばに子どもがすわっているのを見た。この人は子どもに、「おまえさんはアツラーにつかわされたのか。ちょっとウンコと小便をしてくる。くるから」という。その人も、にげていった。二人ともいっしょにどこかにいってしまい、荷物をおいていった。

さて、子どもの母親がおりてきて、荷物をといてみると、はいっていないものがなかつた。

さて、女はそのうちほしいものだけをあつめて、残りをかくしておいた。女はその荷物を頭にのせて、自分のむこさんの屋敷までもつてかえつてきた。女は、「こういうことがあつて、こうして、アツラーにいたのだ」といった。

さて、むこさんは残りのもののおいてあるところまでやってきて、むこさんたちはそれを家にもつてかえつた。

こうして、この女は富んだとき。

(語り手 一九七一年一月二日、バーセーウオ村出身のアブ
ドゥッラーイ・オスマース、マルアにて)

